

## シンポジウム

## 〈格差社会〉ドイツ？

2009年6月20日(土) 共立女子大学

司会 姫岡とし子・平島健司

現代ドイツの社会国家改革と SPD の危機

近藤潤三

働き方の変化と社会的格差

田中洋子

格差・貧困と社会保障改革

布川日佐史

〈格差〉をめぐる政治的争点化の変容：EU 中のドイツ

網谷龍介\*

コメント 日本と比較して

戸田典子

## はじめに

平島健司

「プレカリアート」という言葉が人口に膾炙し、貧困層の増大が社会問題として取り上げられているように、近年のドイツにおける労働と社会をめぐる状況は危機的である。かつてドイツは、政党や社会パートナーを初めとする主体が社会国家のさまざまな制度を通じて協働を実践し、経済成長と社会的公正を成功裡に両立させるモデルであった。しかし、冷戦の終焉後、高位の失業率が常態化する一方、社会国家は機能を低下させて財政危機に陥った。1990年代後半には「改革の停滞」が嘆かれるようになったのである。はたして「モデル・ドイッチュラント」は、国家統一、グローバル化、マーストリヒト条約以降の欧州統合の進展、あるいは少子高齢化などの環境変化の中で衰退してしまったのだろうか。本当に、ドイツの社会も格差社会となり果ててしまったのだろうか。

ドイツの「格差社会」をとり上げた今回のシンポジウムでは、その現実を議論するためにいくつかの観点を用意した。社会民主党は、1990年代末から10年間以上にわたって政権にあったにもかかわらず、なぜ、社会国家を守りきることができず危機に陥ったのか。ドイツの職場や地域社会、家族は「格差社会」の中でどのような変化を経験してきたのか。「格差社会」へと変化する社会に対して実際にとられた社会保障面での政策対応は具体的にいかなるものであったのか。また、ドイツの政策対応は「社会的排除」の解消を掲げた EU からはどのような影響を受けてきたのか。「失われた90年代」に続き、新自由主義的な一連の改革を経験し、今日では先進国の中でも高い貧困率を示すに至った日本にとって、ドイツの経験を無視することはできない。ドイツの社会も日本のような「格差社会」となりつつあるのか。格差を改善するにはどのような方策がありうるのか。「格差社会」ドイツを論ずる意義は小さくない。

\* 網谷龍介氏の報告は、事情により次号に掲載される予定である(編集委員会)。